

り、より大胆な平面構成になると寝室と昼のゾーンの間の混淆も試されている。こうして、親密領域は寝室に縮約され、かつてないほど専用浴室と連結される。さらに、最も注目すべき新しさのひとつが屋内と屋外の分け方である。かつて単純なファサードだったものが、今では屋内外の環境を分離するより明確な道具になった。アトリエ・ケン・ブ・ティルとラトン&ヴァサルの例（「CASABELLA」878号に掲載）を見ると、いかにしてロジgiaが造形の方便となって建物の形態そのものを決定し、また同時にロジgiaを温室、リビング、あるいは付属の個室に変身させることで住宅の新たな空間的ヒエラルキーを構築できるかが示されている。これに対して、COBEの作品ではファサードは非物質化され、進歩的の第3次産業と同一視可能な広いガラス壁に変わり、周辺世界に恥じらいもなく内部を見せている。いずれも、ファサードに特徴を持たせることによって住宅の家庭的性格が建物の外観に反映されており、これまでと度合いの違うプライバシーと都市への恐れ（ない）との新たな方策を提示している。

第4にして最後の徴候は、中間的スペースへの設計のこだわりに関係する。廊下、階段室、玄関広間や通廊、中庭、庭園がますます洗練された意匠の例となっている。まるで都市の一面を小型にして喚起しているようで、ここでは所狭しと並ぶ共同住宅の庭に詰め込まれた風景の構成要素が、自然そのものの縮小された表現に変わる。この意味において、過去の事例との違いは根本的なものだ。ロビンフッド・ガーデンズの「天空の道」あるいはユニテ・ダビタシオンの「通路=街路」が呼び起こしたのは、建物内部に移された都市空間だった。これに対して現代の実践例は、都市の物理的フォルムを反復せずに都市の複雑性に同化していく。したがって、バルコニーの代わりに道路を作ることではなく、建物自体の内側に都市の複雑さ、社会性、多様性を再創出することを意味している。

これらの徴候はある全体像を描き出す。家庭的経験は住宅の壁の内側にとどまるものではなく、まさにこの考え方に対して住宅の設計は建築的回答を与えねばならないのだ。ますます個人主義化する社会では、主体はあらゆるスケールへの注目を強く求め、個人的経験は住宅設計の鍵となる。このアプローチにおいて価値判断はない。唯一存在するのは、現実を解釈し、未来のすべての住民により広い家庭生活の経験を提供し、まさにその人のライフスタイルを作り上げるための実践的方法である。

## 「ペイルマーメア団地クライブルク棟の改修・改築」

設計=NLAアーキテクト、XVWアルシテクチュール

### 1ユーロでクライブルクを手に入れる

カミット・マーニ

参照 | 本誌pp.18-28

時として、ひとつの建物はある歴史、瞬間、あるいは国家の象徴になり得る。その価値は建築物の特性を越えて、より広範な規模に及ぶ。オランダ人にとってペイルマーメアは、確実にこうした建物のひとつだ。1960年代に建設されたペイルマーメア団地は、ヨーロッパの大都市を悩ませた慢性的な住宅不足の解決を目指した実利主義的動きの、最も洗練された象徴である。

公共事業の特別な試みたるペイルマーメアは、都市を考える新しい方法の象徴であった。そして近代建築運動の諸法則を改変して、アムステルダムの旧市街よりはるかに巨大な、約10万人が住むことのできる住宅地に変える手法の象徴だった。しかしながら、時を経るにつれて、光と闇を孕むより議論の多い複雑な歴史が浮かび上がってきた。本稿で取り上げるプロジェクトは、その最後

を飾る輝かしいエピソードだ。ペイルマーメア団地を形づくる50棟の建物のひとつ、クライブルク棟の再生と修復である。

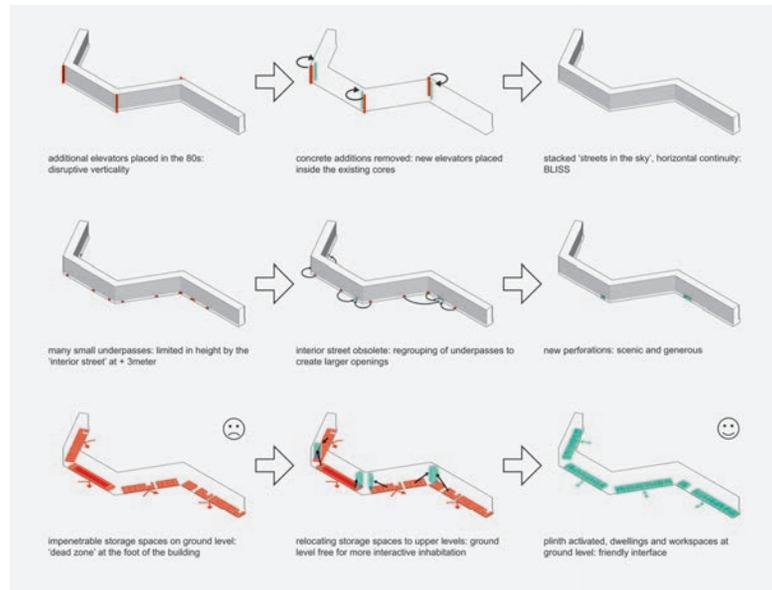
急速な物理的衰退とその結果としての社会的放置の後、1990年代半ばから、アムステルダム市は強力な再生計画に着手した。ペイルマーメアの建物は大半が取り壊され（約30棟）、低層で中庭式の新しい建物に建て替えられた。田園都市モデルに対して、歴史都市のモデルが選ばれたものの、歴史都市の錯綜や高密度は踏襲されなかった。このプロセスのなかで、都市郊外の諸価値を目指す、より広範な要求を満たそうと1960年代に採用された近代的モデルへの批判が明確に述べられた。自動車用道路と歩行者用道路の厳格な分離は覆され、既存の街路は新設の公共交通路線に活用し、車両の通行は地上レベルに移された。緑地に分散する元来の「蜂の巣」状の都市構造は、それぞれ少しずつ弱められて新都市に吸収された。そこでは、街路、建物、建物外壁の連続という関係が、住宅地を構成する母型として再登場する。この大規模なプロセスにおいて、アムステルダム市はペイルマーメアの本来の姿を残す一片を都市の歴史の証人として保存することを決めた。



足元廻り



全景



改修計画の流れ

クライブルクとは団地の残滓を構成する6棟のひとつで、最後に修築が施され、モダニズムの偉大な建築物の再生における卓越した事例になった。2009年にハウジング・コーポレーション・ロッホデール社は、7,000万ユーロという修築費の見積もりを受け、また住民と行政からの強い要請を受け入れるかたちで団地解体計画を取りやめ、代わりに不動産開発を進める力のある執行人を選ぶための協議を開始した。デ・フラット協同組合(コンドル・ヴェッセルス・ファストゴート、ヘンドリクスCPO、フィレオ・ファストゴート、ホラント・リヒトから構成される)が競争入札を制し、1ユーロという象徴的な値段でクライブルク棟の新所有者になった。プロポーザル案は革新的で実験的である。外壁、設備、バルコニー、共用部分を改築する一方で、住戸は未完のまま残して初期投資を最小化しつつ、セルフビルド(DIYを意味する「クルッセン」)の工程も想定して未来の所有者が特定の解を選べるようにした。このことによって極限までコストを抑えた住宅を市場に委ねることが可能になり、オランダ住宅政策における新たな財政・実行モデルが実験された。NLアーキテクトとXVWアルシテクチュールの設計案はこの路線に加わるもので、設計のさまざまなアクションを実行に移す際の実用主義的正確さが特徴である。建築家たちの狙いは2つの点に向かった。まずフォープ・オッテンホフ(1906-68)が設計したクライブルク棟本来の記念碑的美しさを復元し、他方で新たな用途に合わせた一連の実験的改変を導入した。バリエーシ

ンの修辞学に彩られた現在の建築的潮流にあって、規模を操作する際の率直な堅実さには驚かされる。1971年に竣工した建物は10階建ての高さで450m以上も直線的に伸び、統一的なバルコニーで連絡された500の住戸と、駐車場がひとつ、1本の公道、1階の倉庫を備えていた。ファサードにはバリエーションがなく、窓と手すりの単調な反復によって総合的イメージを伝えていた。提案された最初の修築工事は、1980年代にファサードに取り付けられたエレベーターの撤去である。これによって、時代とともに積み重ねられた増築部分をすべて取り去り、ファサードの水平的画一性を取り戻すためである。この選択に何の躊躇もなく、結果として成功した。また建物の規模にその特異さがすべて表出された。外装の建具類は新たなガラス窓に取り替えられ、住宅内部の自然採光をより高めるため、将来的に開口部の不透明な部分をガラスに換えることも想定された。建築家たちは窓の解として大きなアバクス[円柱頭部の頂板]をあらかじめ設置したうえで、住民に各自の必要性に最も合致した解を尋ねた。その結果が、一連の軽やかなバリエーションで、さっと見ただけではほとんど見分けがつかない。こうして建物の冷酷な単一性との興味深い対話が生まれた。

2つめの作業は1階に関する。もともと1階の内部には納屋や倉庫が置かれていた。この空間とのかかわりを活性化させるため、倉庫は上層階のエレベーター室の周囲に移動され、1階はアパートメント、作業場、共有

スペース、保育園に様変わりした。そのほかに、ヴォリュームの1階部分を11本の狭い通路が横切っていたが、それらをまとめて3ヶ所に2層吹き抜け(高さ6m)の大通路が作られた。さらに、1階の通路を減らしたことによって、デュープレックス式に1階と連絡された空間を作れるようになった。こうした作業には共通の狙いがあった。建物の足回りの性質を改変するために、周辺の空間と連続性を打ちたて、公的な水平の通路と私的な垂直の通路を交差させるのだ。

住宅が並ぶ上層階において、建築家たちは屋内空間の新たなまとめ方を実験した。本来のグリッド構造を起点に彼らは仕切り壁に手を加え、後の段階で入居者によって工事ができるような基礎となる解を設計した。エレベーターによる垂直の連結と、通路による水平の連結との交



全景

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2018 Arnoldo Mondadori Editore  
©2018 Architects Studio Japan



北側上空より見る

マタ・アトランティカ  
向きで濃密な「大西洋岸森林」のゾーンに囲まれている。これはブラジルでは東海岸の大半に沿って広がる森林地帯を指す。敷地の地形学的諸特徴をふまえると、空間の観点からも機能の観点からも、設計案の解を決定するのは「断面」の原理である。確かに、建築的構成はほぼすべて2本の輪郭線の関係に規定されている。重要な順に見てみよう。床のラインは、斜面に新たな輪郭を与えて3つの広いテラスを形成する。屋根のラインは、擁壁の最頂部から少し高い位置に浮かび、人の手が入った地形とその上の空との間に人工的な水平線を描く。

第二次世界大戦後からブラジル建築のトポスとなった(アルティガスあるいはより最近ではメンデス・ダ・ローシャを想起されたい)コンクリート屋根は、プロジェクトの分節化において一義的役割を帯びて、その屋内外の空間に特質を与え、多様な空間的クオリティを決定する。屋根は厚さ15cmの矩形スラブで、8本の華奢な柱からなるグリッドで支えられている。事実上、屋根を特徴づけるこれらの柱の細さは尋常でなく、ほとんど超自然的でさえある。その上、主要道路から住宅へのアプローチを特徴づけるのも屋根の上層部なのだ。これが周囲の木々の梢に囲まれた、約20×10mの広い展望プラットフォームへのアクセスを提供する。このプラットフォームは幅1mの水路に囲まれている。水路は手すりにもなり、また水路の内側の高か

らパノラマを眺められる。島の床はガラペイラ材パネルを中央軸に対して斜めに敷設しており、こうして左右対称性を強調しつつ来訪者の視線を水平線へと導く。

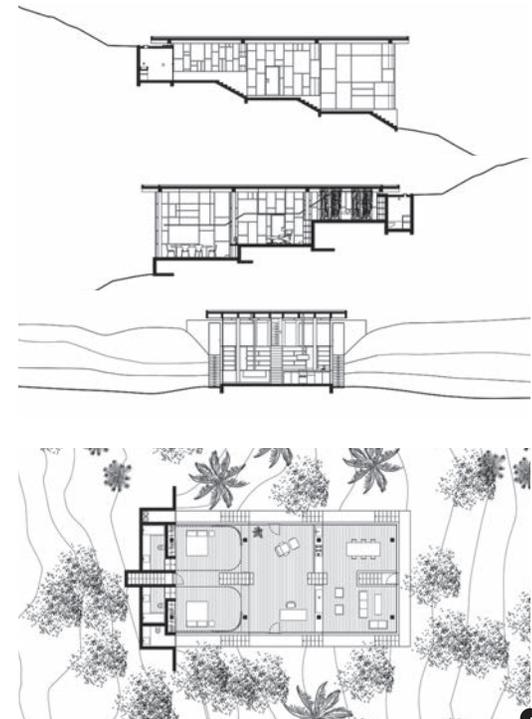
住宅には同じ主軸上に置かれた階段からアクセスする。住宅の中央スペースに連絡する通路は、平行な鉄筋コンクリートの2枚の壁の間を、屋根のくぼみをくぐるように進む。屋内に着くと、長方形のワンルームがあり、そこに住宅機能のすべてが置かれている。部屋(そう呼んでよければ)は完全にガラス張りとなされ、住宅のより親密なゾーンから外の庭に面したゾーンに降りていくにしたがっ



擁壁と屋根スラブの関係を見る



南側のエントリー・アプローチ



平面図/断面図

て天井が高くなる。テラスを囲む(また特徴的なジグザグの輪郭を断面に与える)擁壁は、三分構造に基づく平面上で5.50mと規則的な距離を保って置かれている。それと同時に、擁壁の高さは地表の不規則な起伏に合わせて上下に変化する。その結果、3つのテラスも同じ奥行きでありながら、床から天井までの高さが変わり、それぞれ異なる住環境を作る。したがって、夜のゾーン(より適切な表現がない)は3つのテラスのうち玄関に近い1つめに置かれたが、そこは高さがわずか2.35mしかない守られた空間である。高さが4.15mある中央のテラスには建築主の書斎

## ワイス / マンフレディ

### ワイス/マンフレディと公共空間の設計

#### バリー・ベルグドール

参照 | 本誌 pp.64-99

『Public Natures: Evolutionary Infrastructures / パブリック・ネイチャーズ: 発展的インフラストラクチャーズ』は、マリオン・ワイスとマイケル・マンフレディが2015年に出版した、ニューヨークにある彼らの建築設計事務所の作品集である。本題と副題の両方に、うわべのさまざまな矛盾を同時に把握する設計哲学と、あまりにかけ離れあまりに分断されている領域の間を横断して建設的な対話を生み出す意志とが要約されている。その考え抜かれた表現は、公共空間を特徴づける自然と建物の分離を消そうとする彼らの努力を伝え、また設計の倫理のみならず、ある研究の指針も示している。それは2018年の不安定化する世界——気候変動に関する合意からグローバリズムの受容、さらに市民的言説の本質そのものまで、わずか数年前に確実だったものさえ早くも揺らぐように感じる世界——で緊急的に取り組まれた研究と言える。

ワイス/マンフレディの設計哲学は、この事務所がより大規模な都市計画的挑戦の現場に携わり、より複雑で実証されていない要求を抱えたクライアントと仕事をできるようになっても、その潜在力をひとつとして失っていない。建物と風景の伝統的な二元論をことごとく捨て去ることによって、そうした区別——形態的、計画的、職能的——は今や、事務所が無視しようと決めた多くの反論と同じく、あらゆる点で陳腐化したことが暴かれた。彼らのプロジェクトは、特別に考案された解の混じり気のない多様性において模範的であると同時に、その各々がかなりの度合いで共通言語を使い、アプローチの一貫性を示し、レベルを落とさずに仕事に従事する点においても模範的である。少なくとも、シアトル美術館のオリンピック彫刻公園のための彼らの独創的な設計——2001年に設計競技で勝利し、10年前に完成した——以降、ワイス/マンフレディは自然を使う仕事と工学技術を採用することとの境界を曖昧にすることで公共領域を形づくってきた。彼らはそれを、何世紀ものあいだ社会と人間生活を支えてきた公的生活と自然の双方にとって、ほとんど歴史の最終段階と思われる瞬間に実践している。現在、公共領域と自然領域は等しく侵食され、現行の政治的言説の高度に視覚化された破壊的な領域では、攻撃に晒さ



東側のガラス・ファサード



中央テラス



上階テラスより見る

が置かれた。そこは周囲の環境との絆が最も直接的なエリアで、住宅の短軸(2つめの対称軸)に沿って置かれた2つのガラス扉で庭と連絡する。最後に、一番低い位置にあるテラスにはキッチンと小さなリビングがあり、ロジヤもしくは展望台を介して風景と向き合う。これは住宅の中で最も明るく最も日当たりの良いゾーンで、地表から1.25 mの高さに持ち上げられ、全体の高さは5.15 mある。

同様のアプローチによって本棚と水廻りの位置が決められた。擁壁に囲まれて置かれる場合——第1のテラスの2つの浴室がこれに相当し、すべての部材が現場打ちされたコンクリートで作られ、家の他の部屋と異なって天井から照明されるため、外界とのいかなる視覚的連絡もない——もあれば、キッチン、本棚、クローゼットのように壁に据え付けられる場合もある。このように、空間はその「デザイン」と無縁のいかなる要素にも邪魔されない。

建築的構成における直線的なレイアウトは、階段の位置によってさらに強調される。階段は中央軸に沿ってほとんど演劇的に空間を突っ切り、最下部で二手に分かれて住宅の外周に沿った屋根付きの通路を作る。しか

し、他の何よりもこの設計案にその原初的な雄大さを与えている特徴は、素材の選択とその扱い方である。基本構造は完全に鉄筋コンクリート造とされ、建築家たちの監督下でたった1日の作業日で打設された。床は屋上テラスと同じく、ガラベイヤ材の洗練された長いパネルを主軸と直角に敷いて仕上げられた。全体はほぼ完全に1枚のガラス壁で包まれ、独創的な鉄の形鋼で描かれたサッシュのデザインは、サンパウロの最良の伝統を反映している。またこれらの形鋼を設計する丁寧さこそが、この作品の成功を決定した。形鋼による優美な約しさは、一般的なアルミニウムの窓枠だったら確実に損なわれたことだろう。そうではなく、ほとんど空気のように透明な図書館住宅は、20世紀初頭から建築的実験の特権的な場を自任した、数多くの「ガラスハウス」の列に堂々と加わるのである。

作品: ヴィニエードの図書館住宅

設計: アトリエ・ブランコ・アルキテトゥーラ——

マッテオ・アルノーネ、ペブ・ボンズ

協働者: Andreas Schneller, Cristina Plana, Marta Pla,

Martina Salvaneschi

構造: Sergio Ludemann, Ludemann Eng.(基礎);

John Biscuola, Biscuola Eng

設備: João Claudinei Alves, JCF Projetos e Construções

木工事・鉄工事: Edivaldo ed Eduardo Lourenço

規模: 敷地面積 5,500 m<sup>2</sup> / 建築面積 200 m<sup>2</sup>

スケジュール: 設計 2013年 / 施工 2014-15年

所在地: Vinhedo, stato di São Paulo, Brazil



コンクリート壁に囲われた浴室

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2018 Arnoldo Mondadori Editore  
©2018 Architects Studio Japan

## ワイス / マンフレディ

### 【オリンピック彫刻公園】

設計:ワイス/マンフレディ建築・ランドスケープ・都市計画事務所  
設計チーム:マリオン・ワイス、マイケル・A・マンフレディ;  
Christopher Ballentine, Todd Hoehn, Yehre Suh,  
Patrick Armacost, Michael Blasberg, Beatrice Eleazar,  
Hamilton Hadden, Mike Harshman, Mustapha Jundi,  
John Peek, Akari Takebayashi  
設計競技・展示構成チーム:Lauren Crahan, Kian Goh,  
Justin Kwok, Lee Lim, Yehre Suh  
構造:Magnum Klemencic Associates  
設備:ABACUS Engineered Systems  
照明:Brandston Partnership Inc.  
地質工学:Hart Crowder  
サステナビリティ:Aspect Consulting  
給排水設備:Anchor Environmental  
グラフィック:Pentagram  
安全・オーディオビジュアル・IT:ARUP  
プレゼンテーション:Owens Richards Architects, pllc  
プロジェクト・マネージメント:Barrientos LLC

施工:Sellen Construction

建築主:Seattle Art Museum

スケジュール:設計・施工 2001-07年 / 竣工 2007年

所在地:Seattle, Washington, U.S.A.

参照:本誌 pp.67-69



全体構成図

### 【マツカン邸】

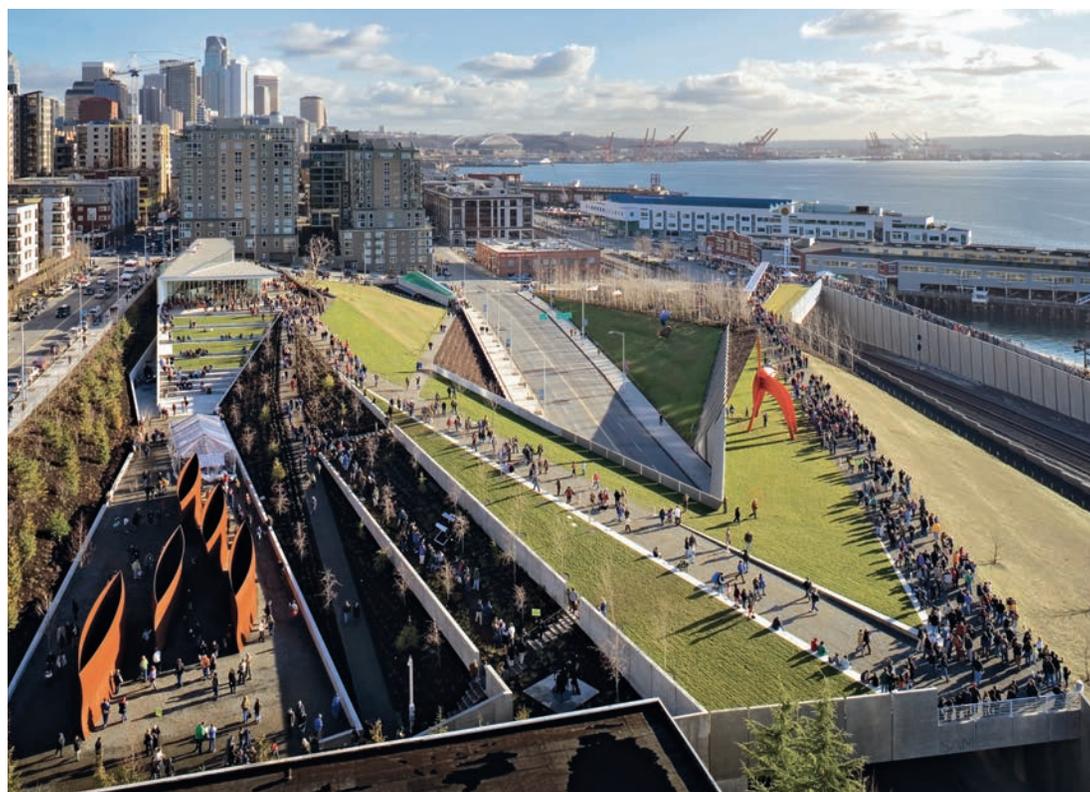
設計:ワイス/マンフレディ建築・ランドスケープ・都市計画事務所  
設計チーム:マリオン・ワイス、マイケル・A・マンフレディ;  
Michael Blasberg; Lee Lim, Hamilton Hadden  
コンサルタント:Michael DeCandia Architects:  
Michael DeCandia, John Cunniffe  
土木工学:Thomas W. Skrable, PE  
建築主:Joseph e Anne McCann  
スケジュール:竣工 2014年  
規模:延床面積 446m<sup>2</sup>  
所在地:Tuxedo Park, New York, U.S.A.  
参照:本誌 pp.69-71



タキシード・パークからのアプローチ



ダイニング・ルーム



オープン当日の賑わい



エントリー・アプローチ

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2018 Arnoldo Mondadori Editore  
©2018 Architects Studio Japan